

# 千葉女子師範の保育者養成と保育内容

中島 千恵子・鍛冶 礼子

## Education subjects relative child care at training for Kindergarten teacher in Chiba Women's Normal School.

Chieko NAKAJIMA, Reiko KAJI

### 問題意識

平成27年4月より子ども・子育て支援法が施行され、幼保連携型認定こども園も次第に増加してくることが予想されている。長時間保育の子ども、標準時間保育の子どもなど様々な子どもが混在する中で、1日を通した保育内容の質の高さが求められてきている。その際の判断基準や精選の理由はどう考えたらよいのだろうか。保育内容を精選できるようになるためには、保育者養成段階での保育内容についての教育が重要である。

筆者らは、保育者養成校で保育内容の授業を担当するにあたって、現在の保育内容の「総合的な指導」「環境を通した学び」について伝える難しさから、保育内容がどうして現在のような形になってきたのかについて振り返ることを始めた。平成26年の保育学会第67大会においては、筆者らに関係の深い千葉大学教育学部附属幼稚園の昭和20年代の研究会録を中心に、当時保育内容がどのように取り扱われていたのかを以下の様に概観した。

千葉大学教育学部附属幼稚園は、創立当初は千葉教育会附属千葉幼稚園として明治36年から保育が開始された。現在は創立110年を超えたところである。現在の千葉大学教育学部附属幼稚園は、昭和41年に四街道から現在の西千葉に移転してきている。明治時代から創設されているにもかかわらず、何度か所属が変わったり、移転したりしたことや、戦争によって焼失したせいで、附属幼稚園に現存する保育資料は昭和20年代以降のものである。そこで、まず昭和20年代の研究会録を手掛かりにした。

昭和20年代は終戦後、昭和22年に教育基本法が施行され、昭和22年の研究会録では民主主義の新しい時代を意識した明るい雰囲気や文章にあふれ、新しい保育を作っていくのだという気概が感じられた。研究会録からわかる保育の1日の様子としては、登園後は自由遊びの時間になっており、製作の室、人形の室、絵本の室、自然研究の室、音楽遊戯の室、休息の室、屋外、というように遊ぶ場所が分かれ、好きな遊びを選択して遊んでいたということである<sup>1)</sup>。部屋が分かっていたのは、戦災に伴い移転した四街道の旧陸軍野戦砲学校連隊本部の建物をそのまま使用したことによっている。

昭和25年からは宮内孝園長が就任し、園長自身は幼児教育が専門ではなかったことから、まず幼稚園の教育環境をよくするための研究や運動を率先して行った。各クラスの担任は宮内園長の影響で、クラスの保護者からアンケートを取って現状を把握して改善点を見つける研究を行ったり、子どもを観察して実態をつかんで数的に表したりなどの研究を進めていた。保育者の主観ではなく数という客観的な尺度を用いていた点に研究の特徴が見られた<sup>2)</sup>。

実際の保育は、子どもの体験が中心になっており、研究会録には研究会当日の日報が掲載されている。昭和25年11月11日（土）の場合、花組（2年保育年少）は「紅葉・落葉拾いと簡単な製作」、月組（2年保育年長）「もみじの歌を歌ったり合奏したりする」、雪組（1年保育年長）は「秋の千代田の森で遊んだ後に製作をする」、松組（1年保育年長）「落葉を拾って製作する」というものであった。季節感があふれ、また感性を豊かにするための体験や表現を楽しむような体験が含まれてい

る。

このような昭和20年代の保育内容はどのように選ばれたのだろうか。まず、保育者らが受けた養成教育について検討していく。

## 千葉県の女子師範学校での保育者養成

日本で最初に幼稚園ができ、継続して教育が行われたのは、明治9年創設の東京女子師範学校附属幼稚園である。当時は幼稚園教育の内容は手探りであり、東京女子師範学校や附属幼稚園で学んだ保育者（保姆）が全国各地の幼稚園創設にかかわった。東京女子師範学校には明治11年に保姆練習科が設置されている。千葉県では、関東の中では東京女子師範学校の次に早く千葉女子師範学校が設置され、明治11年から授業が開始されたということである。この創立の際は官立の女子師範だったが、明治17年にいったん廃止されて千葉師範学校の女学部となった。また名称変更や場所の移転も続き、明治30年9月28日に千葉町字猪ノ鼻丘にあった千葉尋常師範学校改築校舎内に移転している<sup>3)</sup>。

明治36年には、千葉県女子師範学校としての設置と翌37年に千葉町に開校する旨が官報で告示されている。これは官立から県立への移管であり、千葉県女子師範の側では「独立」という言葉を用いて歓迎され、さらに教員養成に意欲を高めた様子がうかがえた<sup>4)</sup>。この頃の卒業生はほとんどが千葉県内の小学校訓導になっている。

幼稚園設置の様子について、大正8年の「千葉県教育細要」によると東葛飾郡船橋町、印旛郡佐倉町、香取郡佐原町、香取郡小見川町、夷隅郡大多喜町における小学校附属幼稚園5園と私立千葉県教育会附属千葉幼稚園、私立成田幼稚園、その他の私立計8園とある<sup>5)</sup>。私立千葉県教育会附属千葉幼稚園については、設立は明治36年とされ、当初は教育会立という私立であったが、大正5年に千葉県女子師範学校代用附属幼稚園に、大正11年に県に移管されて千葉県女子師範学校附属幼稚園となっている。さらに昭和18年には文部省への移管となり、戦後は千葉大学教育学部附属幼稚園となった<sup>6)</sup>（代用附属幼稚園時代の年代については明治41年からという

説もある<sup>7)</sup>）。

この千葉県女子師範学校の「創立三十五年記念帖」（大正元年）では、大正元年当時の職員は、学校長、教諭、教諭兼附属小学校主事、教諭兼舎監、教諭、教諭兼訓導などとなっている。教職員36名の中に一人だけ保姆があり、石井シゲという人物である。従って養成教育としては幼稚園保姆も可能性としては視野に入っていたのではないと思われるが中心は小学校教員であった。

養成教育の内容は記載されていないが、回想録の中で語られているものは以下の通りである。

「当時は専ら西洋文明の輸入時代なりしより教授は智育に傾き徳育体育の如きは比較的等閑に附せられたるものの如し

学科目は教育数学地理歴史物理化学習字図画体操唱歌裁縫割烹等にして何れも注的に教授せられ試験を重んじ毎年必ず大小試験一回づつ行はれ其都度成績を発表して席順を変更せられきされば学科の競争はなかなか烈しかりき」（原文のまま）

以上のように、明治期には小学校教員の養成を中心とした「注进的」な教員養成が行われ、同時に裁縫や割烹など女子としての教育も行われていたことがわかる<sup>8)</sup>。

## 大正15年の創立50周年記念号より

大正15年には11月7日に創立50周年記念式典を行ったとある<sup>9)</sup>。この時には、千葉県女子師範学校職員とその担当科目が記載されていることから、教授されていた科目は次のものであったと考えられる。

修身、教育、国語、漢文、図画、手工、哲学、体操、裁縫、作法、歴史、地理、博物、数学、家事、手芸、物理、数学、化学、習字、法経、英語、課外に点茶・生花（以上、掲出順）

また、この50周年記念号には、本校職員に加えて以下の記述が見られ、幼稚園を附属機関として養成を行っていたことがわかる。

附属幼稚園職員は、

一ノ組 千葉県女子師範学校卒 大正8年3月1日着任 保姆訓導 豊岡 周

二ノ組 東京女子高等師範保育実習科卒 大正14年3月

31日着任 保姆 山村きよ  
三ノ組 千葉県女子師範学校卒 大正13年2月29日着任  
保姆訓導 鈴木八重子

ここにある「保姆訓導」だが、これは、師範学校でも教え、幼稚園でも保育を受け持っていたと考えるのが適当ではないかと思われる。

教科目を見る限りでは、この時期においても、千葉県女子師範学校では教科目としての「保育」はなく、小学校の教員養成の一環として保姆になる可能性を考えて養成していたに過ぎないと考えられる。しかし、大正期には千葉師範学校附属小学校での自由教育が実施されていた時期でもあり、大変話題にもなっていた。女子師範学校においても大正期にはそのような自由主義の理念を考慮して教育にあたっていたことは推測することができる。

## 昭和15年の調査より

文部省教育調査部の保姆養成施設についての概説が「幼稚園教育九十年史」に転記されている。これによると、千葉で保姆の養成機関を設けて養成を開始したのは昭和3年とされている。千葉女子師範保姆養成所である。この時期は公立の保姆養成所であることは珍しく、東京女子高等師範学校を除くとほとんどの施設が私立であったということである（全32施設）。この時の教授科目は

修身、教育、理科、図画、手工、音楽、体操、心理、管理法、歴史、数学

であったとされている<sup>10)</sup>。他県の保姆養成施設でよく教授されている「保育」が千葉女子師範保姆養成所になかったことについて、「保育学は（各養成校において＝著者注）平均して週3時間以上与えられているが、千葉の施設では与えられていない。これは一見して奇に思われるが、これは教育学中で行なわれているとすべき一方、本施設は現在に於て実際には殆ど代用教員の養成機関になっており・・・（後略）・」と説明が加えられている<sup>11)</sup>。保姆養成は1年間の養成期間であったが、昭和3年に保姆養成が開始されたにもかかわらず、昭和15年の調査から

は未だ保姆としての養成や保育内容は教授科目の中では重視されていなかったといえる。千葉県女子師範の教科目は他機関に比べるとその専門性は長年にわたって小学校教員中心であったことがわかった。

教科目では「保育」がなかったが、昭和3年当時から実習を附属幼稚園で行っており、実務経験を重視した養成の特徴を持っていたことがわかる。附属幼稚園では昭和3年からの教育実習の記録が残されている<sup>12)</sup>。それによると、

「昭和三年に、千葉県女子師範学校は保姆講習科を設置、修業年限は1年で、第2部1年（専門学校格に昇格後は本科1年）の全教科を本科生にまじって学習するとともに、附属幼稚園で実習した。当時、幼稚園が三学級であったため、保姆科生の募集人員を九名とし、教育実習は各学級三名ずつで行っていた。実習日数は六週間、午前中幼稚園で実習し、午後は女子師範学校本科生と共に授業を受けていた。本校での授業は、小学校教員のための授業であったから、幼稚園保姆の肩にかかっていた。」<sup>13)</sup>と、幼稚園での実習経験が大変重要であったことがわかる。

昭和18年になり再び官立となってから、女子師範本科の学生が1班約20名で、2週間ずつの実習をした。本科は3組あり、1組半分ずつ実習したので、のべ12週間の実習期間となった。昭和18年の実習内容については以下のように記載されている。

第1日目 指導講話、保育  
第2日目 遊戯  
第3日目 園芸、手技  
第4日目 遊具修繕、紙芝居画面製作  
第5日目 粘土再生法実習  
第6日目 遊戯  
第7日目～ 各組別保育実習  
最終日 研究発表（人形芝居実談）

まず前半には教材の実技をし、後半に各組に配属されて実際の指導を行っていた。

評価については、「幼稚園保姆養成所時代の『保姆科採点一覧表』中に、製作、講話、遊戯、自然観察、教育実習の項目があり、それぞれ優・良・可で表示され

ていた」とある<sup>14)</sup>。保育内容としてこれらを教えていたということであろう。その他の細かな資料は見あたらない。

## 昭和20年の卒業生の回顧文集「あかね」より

昭和10年代は戦争が激しくなっていた時代であり、千葉県女子師範学校も空襲で建物が焼失したことから、実物の記録はあまり存在していない。

「あかね」とは千葉師範学校女子部昭和20年度卒業生による回顧文集で、昭和43年になって、戦没した学生教員のための慰霊祈念碑（千葉市富士見町）が完成されたことをきっかけにして出されたものである。現在の千葉大学附属図書館において第1集から第5集の冊子を確認することができる。

「あかね」第1集の卒業生の回顧文によると、昭和20年6月10日午前8時に激しい空襲を受けて富士見町にあった千葉師範女子部校舎が焼失、その後も何度か空襲があったようで、その時焼け残った校舎（附属幼稚園の講堂など）も完全に焼失したのは7月6日夜半の空襲であったということである<sup>15)</sup>。この時は、同じ富士見町に附属小学校、附属幼稚園があり、やはり附属施設も多くが焼失した。この6月10日の空襲では師範学校女子部の8名の学生と1名の職員が戦没したということである。写真から見ると、現在の千葉駅前から延びる大通りの真中のグリーンベルトの場所であることがわかる。

この回顧文集からは、昭和19年から20年の時期の女子師範の教育は2年制で行われていたということがわかるが、千葉県には軍需工場も多かったことから、教育よりも戦争に協力する仕事が多くなっていたようである。例えば、卒業生増田美智子の回顧によると、女子師範学校は「学校工場」となっていて被服室で勤務が行われていたということで深夜勤もあったそうである<sup>16)</sup>。

また、卒業生石川チエ子は、学徒動員日記という形で回顧している<sup>17)</sup>。昭和20年1月10日動員令が下り、蘇我の日立航空機株式会社千葉工場本館で受け入れ式が行われたとある。勤務する日と学業のための登校日が

あったということである。学徒動員は夜勤、深夜勤もあり、合間に授業も受けていて、工場は3部制で飛行機を製作していたということである。夜勤、深夜勤の合間の授業は大変だったと思われるが、「兵隊さんはもっと大変」という記述も見られる。

このような状況では、学業の時間はかなり削られていたと考えるべきであり、このような大変な状況をくぐり抜けた教員が戦後の日本の教育を担っていたということである。生きることが第一であり、世情も落ち着かない状況では保育について専門を深めることは大変難しかったと思われる。

## 四街道時代の始まり

附属幼稚園は、昭和20年の空襲で園舎が焼失したために夏に幼稚園を一時閉鎖した。保姆は一時附属国民学校勤務となったと記録にある。閉鎖している夏の間に終戦を迎え、千葉県女子師範学校と附属幼稚園は印旛郡千代田町四街道の旧陸軍野戦砲学校連隊本部を拠点にすることになり、10月に移転することが決まっている。この四街道で保育を再開したのは昭和20年11月5日とあり、以降昭和41年春まで四街道で保育が行われた<sup>18)</sup>。

新しい法律で千葉大学に統合されたのが昭和24年とされている。このとき千葉大学千葉師範学校附属幼稚園に、昭和26年には千葉大学教育学部附属幼稚園と名称変更されている<sup>19)</sup>。

長い戦争の時代を経て、再開した四街道で保育を担当したのが昭和22年の研究会録では4名の保育者となっている。田邊（旧姓豊岡）周（附幼80年史の山川幸枝の回顧によると主任保姆とされている）・杉田幸子・渡邊あけみ・渡邊俊枝である<sup>20)</sup>。

田邊周は、着任が大正8年となっており（前掲）、戦後に保育が再開されたこの時にはかなり経験も積んで主任という役割を担っていたようである。山川幸枝（昭和3年着任）による回顧文によると、昭和3年当時の職員は田邊周、山村きよ、山川幸枝の3名で、このうち山村きよについて「お茶の水の保母科御出身」ということで「月に何回か母校の保育研究会に参加され、新しい知識を持ち帰られますので保母3名が一丸とな



ってそれに取り組みました」とある。また、毎年文部省主催で開催される「保育講習会には必ず3名出席して学び」、東京女子高等師範学校附属幼稚園の「倉橋惣三先生、及川ふみ先生からは、直接のご指導をしばしば受けまして『千葉はお茶の水幼稚園の雛型』と倉橋先生が仰せになれる位でした」とある<sup>21)</sup>。田邊周は戦前から戦後にかけて、また、この回顧文の山川は終戦まで勤務したとのことであるので、千葉師範学校附属幼稚園も倉橋惣三による自由な幼児教育の影響を受けていたことが考えられる。

また、昭和22年の「千葉県師範学校保姆養成所規則」第5条によると、教科科目と毎週授業時数は以下のようになっている<sup>22)</sup>。

基本科目	教育二、保育四、音楽二、図画一、 遊戯一、手技一、観察一、談話一
随意科目	公民一、國語漢文二、歴史一、地理一、 数学一、理科二、家政三

合計二四

但保育実習については別に之を定める。

第14条には、修了者には、幼稚園教員免許状、随意科目を履修したものは国民学校初等科教員免許状が授与されることが定められていた。このように、戦後になるとようやく保姆養成の教科目に「保育」が入り、保育内容として「音楽」「図画」「遊戯」「手技」「観察」「談話」も設定され、小学校教員養成の科目の方を選択科目としていたことがわかる。

したがって、昭和3年以降は実習を通して、昭和22年以降は養成段階から保育内容について学ぶことができたということがわかった。

## 結論

戦災によって戦前の実物資料が少ないが、千葉県女子師範学校での養成教育を中心に保育内容についてどのように教育されていたのかを検討した。

千葉県女子師範学校では、長い間養成の段階では小学校教員養成が中心のカリキュラムであり、保姆になる卒業生もいたが、ほとんどは小学校の教員になっていた。昭和3年の保姆養成所が開設されて以降は、実

習が保姆養成にとって重要な役割を果たしていたことがうかがえた。また、附属幼稚園の保育現場においては、戦前から東京女子師範学校の保育に影響を受けていた様子がわかった。

戦前から戦後にかけて継続して勤務していた職員（田邊周）がおり、戦後はこの職員が主任保母として保育を再開させていることから、引き続きお茶の水女子大学（特に倉橋惣三）の影響を受けながら保育内容を精選していたことが推測された。倉橋惣三は、大正期からの新教育運動を保育の場で先導していた人物であり、戦後再開された千葉師範学校附属幼稚園においても幼児の自由な遊びや活動を中心とした保育の理念が背景にあって、保育内容を精選していたものと考えられた。

## 引用文献

- 1) 田邊周 新しい保育を試みて 「新保育の記録から」 千葉師範学校附属幼稚園 昭和22年11月18日 P2
- 2) 幼稚園教育研究会録附研究収録 千葉大学千葉師範学校附属幼稚園 昭和25年11月
- 3) 「創立三十五年記念帖」 千葉県女子師範学校 大正元年
- 4) 同
- 5) 千葉県教育細要 千葉県教育会 大正8年 P183
- 6) 夢 子どもたちとともに 創立100周年記念誌 千葉大学教育学部附属幼稚園 P11
- 7) 創立80周年記念誌 千葉大学教育学部附属幼稚園 P98
- 8) 創立三十五年記念帖 千葉県女子師範学校 大正元年
- 9) 創立五十周年記念号 千葉県女子師範学校 大正15年
- 10) 文部省 幼稚園教育九十年史 ひかりのくに昭和出版株式会社 P189
- 11) 同 P185
- 12) 創立80周年記念誌 千葉大学教育学部附属幼稚園 P103～108
- 13) 同P109
- 14) 同P112

- 15) 旧職員緒方惟精「女子師範の思い出」 あかね 第1集  
P2-3
- 16) 卒業生増田美智子による回顧文 「あかね」第1集 P7
- 17) 卒業生石川チエ子 学徒動員日記 「あかね」第1集  
P8
- 18) 前掲6)
- 19) 前掲6)
- 20) 前掲1)
- 21) 旧職員山川幸枝 八十年の一駒の思い出 前掲7) P63
- 22) 前掲6) P92